

激動の時代を生き続けた偉大な先覚者

横井小楠

慶応元年（一八六五）五月、熊本城下から二里ほどにある沼山津に一人の男が訪れた。土佐浪士、坂本龍馬、薩長同盟の橋渡しして鹿児島に赴き、帰途この地に立ち寄ったのである。

「小楠先生。しばらく。」

出迎えたのは小楠横井平四郎。二人は再会を喜び合い、杯を交わした。「信頼するのは（勝）海舟先生。そして、信頼し、尊敬するのは小楠先生。」龍馬は事あるごとに、そう口にしてきた。小楠の思想を日本一のものとして仰ぎ、心服していたのである。一方小楠は、自分の息子ほども年の離れたこの青年の行動力を、高く評価していた。

大久保（利通）や西郷（隆盛）の仕事ぶり。武士や町人や農民の区別もなく、皆の意見で日本の進むべき道を決める新しい政治体制のこと。何杯も何杯も杯を重ね、二人の話はますます熱を帯びていった。彼らはすでに、幕府の政治には見切りをつけていた。龍馬は、岩倉具視や大久保、西郷を中心とした

新政府の構想について語り出すのだ。た。

「さて、わしは何をする。」

小楠は冗談のような口調で訊ねた。

「そうすなあ。まあ先生は、二階にでもござって、のんびり酒でも飲みながらながめておられたらいいでしょう。大久保や西郷ともが、行きづまったりした時だけ、ちよいと指図されればようござりましょう。」

「あはは、それはいい。」

二人は大声で笑った。明治維新の三年前のことである。

実学党の創始者

横井小楠は、名を時存、通称、平四郎と称した。文化六年（一八〇九）細川藩士横井時直の次男として、熊本市内坪井に生まれた。藩校時習館に通い始めた彼は、早くから頭角をあらわし、二十五歳で優等生の制度である居寮生二十九歳の時には、塾長に当たる居寮

長に抜擢されている。彼はこの時期、時習館の授業内容にも改革を加え、寮生達の信頼を一身に集めていたという。更に、天保十年（一八三五）には、藩から江戸遊学を命じられている。水戸学の大家、藤田東湖らと親しく交ったのもこの頃である。しかし、一年もたたぬうちに熊本へ呼び戻されてしまう。酒の上での失敗が原因だった。

郷里に戻った小楠は、長岡是容、下津休也、荻昌国、元田永学ら時習館時代の友人達と共に研究会を始めた。文章や字句の解釈だけに苦心していた当時の肥後の儒学に対し、現実に関ざした学問の在り方を示そうというのである。これが後に藩内に新風を吹き込み維新後の熊本にも様々な足跡を残すこととなる実学党の起りである。この研究会は、一月に五十回ほど開かれていたというから、大変な精励ぶりである。やがて小楠は、家塾を開く。最初の入門者は、芦北郡佐敷郷の総庄屋の嗣子、徳富一敬、蘇峰、蘆花兄弟の父で



ある。次いで矢島直方、明治の教育界に尽力することとなる竹崎茶道、後に熊本県製糸業界の父と呼ばれた長野藩平など、総庄屋層の子弟を中心に多様な人材が集まった。

明堯舜孔子之道
尽西洋器械之術
何止富国
何止強兵
布大義於四海而已



幕政にも参画

ペリーの来航など、時代はますます風雲急を告げていた。こうした中で、小楠を一藩の師として招く人があった。越前藩主松平春嶽である。小楠は嘉永四年、全国を遊歴した時、福井に立ち寄り、藩士達に圧倒的な印象を残していた。折から藩政改革に乗り出して

た春嶽は、政治顧問兼藩中教育の指導者として、小楠借り受けを肥後藩に申し入れたのだった。こうして小楠は福井へ旅立った。安政五年（一八五八）、五十歳の時である。越前藩での小楠は、藩の教育や殖産貿易を指導して好成績をあげた。当時の愛弟子に、後の明治維新で五箇条の御誓文起草した由利公正がいる。文久二年（一八六二）、江戸に出た小楠は幕府の政事総裁となった春嶽の政治顧問として、中央政局で活躍することになった。そして、春嶽を通して、人材登用、軍制改革、海軍の振興、学制改革等を断行した。短期間ではあったが小楠は幕末の政局に鮮やかな足跡を残したのである。

早すぎた男

しかし、ここで事件が起った。文久三年、江戸詰め肥後藩士と酒宴中に暗殺団に襲われた。同僚を見捨てて逃げたというので、士席剥脱、知行召し上げの処分を受けてしまった。小楠は沼山津の自宅四時軒に閑居し、静かに時勢の推移をながめていた。坂本龍馬が、この地を訪れたのもこの頃の事である。

それからしばらくたって、維新の大業は成った。この時局の急転によって小楠の持論は再び評価され、新政府の中枢に呼び出されることとなった。彼は参与に命ぜられ、従四位下に叙せられた。破格の抜擢である。彼の開明的な見識を、新政府は是非とも必要と考えたのである。

しかし、翌、明治二年一月五日、御所から帰る途中暗殺者に襲われ、六十一年の生涯を閉じた。

幕末維新という大きな歴史のうねりの中で、将来の日本が歩むべき正しい道を示そうと努めた横井小楠。国家は富むだけでも軍備を強くするだけでもいけない。地球上で一番大切なのは、お互いの立場を認め合い、お互いが許し合う寛容の心を持つことだとする彼の思想は、現代にも通じるものとして高く評価されている。激動の時代を駆け抜けていったこの偉大な先覚者は、あるいは早く生まれすぎてしまった男なのかもしれない。

参考文献 熊本県人／渡辺京一

第一等の人／井上桐樹

横井小楠こぼれ話／徳永洋

横井小楠伝／高浜幸敏

協力 熊本市横井小楠記念館